

## 46年前の思い出

藤田富雄

年報の本冊の方に「昭和二十二年の全日本宗教学平和会議」について書かせていただいたが、その当時の思い出の部分は「別冊の方に」という編集者のご指示なので、いくつかのエピソードを並べることにした。エピソードの背景については、本冊の方を参考にいただければ幸甚である。

### (一) 銀舍利の握り飯

準備委員会などでは、出席者に昼食を饗した。おにぎり二個、おでん二片に沢庵というまことにお粗末な食事であるが、その用意が大変であった。宗教学研究室からの四名のアルバイト（高木きよ子、浅野満、柳川啓一、藤田富雄）は、築地本願寺の庫裡で築地市場で買ってきたおでん材料を煮込み、握り飯を作るだけでなく、盛り付け、配膳から後始末まで、まさに大童で、くたくたになった。食物の乏しい時代であったから、ずぶの素人の手づくりの粗食を、出席の諸先生が何も残さずに食べて下さった。今から考えると嘘のような事実である。関西のお坊ちゃん育ちの柳川啓一が、三角むすびが握れなくて、「どうも、どうも」と言いながら困り果てていた顔を思い出す。彼の顔と重なって出てくる握り飯は、まぎれもなく真っ白な銀舍利である。純白米は当時の貴重品であったから、あの昼食は決してお粗末な代物ではなかったのである。

### (二) 激変の時代の政治

宗教界や政界の裏話を聞いて、驚き、嘆き、憤慨したことも少くはなかった。日本宗教連盟の理事長安藤正純が、「軍閥政治反対を目指し鳩山一郎や片山哲たちから推されて翼賛会総務になったために、今回の資格審査にひっかかったのだ。総選挙の五日前までに再審査要求が通れば、東京一区から必ず当選してみせる。」と息巻くのを聞いたのは、四月七日の準備委員会の散会後に茶をすすりながらの雑談中であった。ちょうど総選挙前二十日であった。GHQの軍国主義者の公職追放がなされたのは、前年の一月四日であるが、一年後の一月四日に公職追放の範囲が拡大され、宗教学平和会議の副議長である安藤正純と地崎宇三郎が資格審査にひっかかり、結局再審が間にあわず立候補できなかった。この総選挙の結果、社会党が第一党となり、五月二十日第一特別国会が召集され、六月一日に片山哲内閣が成立した。安藤正純の悔しさがわかるような気がした。

占領下のわが国には、ダグラス・マッカーサー連合軍最高司令官のGHQという政府と、内閣総理大臣をヘッドとする日本政府という二つの政府があったのは事実である。非公式の隠れた政府が、国民から隔絶された形で新日本の変革にかかわっていた。公式の政府の施策やヘッドの交代に

ついて、直接にGH O批判につなげて発言のできない限界と焦燥を、眼のあたりの安藤正純に投影して理解していたのが、当時の私であったと思う。

### (三) 奇縁の出会い

打合せなどで来訪される当時の宗教界の大先生の顔と名前をアイデンティファイするのは大変であった。しかも、思いがけない話に耳を傾けることができたのは貴重な体験であった。ところが、奇しき出会いがここで私自身に起ったのには驚いた。

四月十六日の仕事を終えて雑談している時に、たまたま軍隊生活のことが話題になった。私が香川県豊浜の陸軍船舶幹部候補生隊で教育された船舶兵であったことを話すと、「それでは下野という教官を知っているかね」と棚瀬襄爾先輩から問われた。「下野教祐中尉は私の区隊長でした」と答えると、「下野は僕の弟だよ。」と返事されたのでびっくりした。お二人が顔付も体形もよく似ておられるから、再三お尋ねしようかとは思ったが、姓も名もかけはなれているので、他人の空似だと勝手に判断して質問を遠慮していたからである。兄が学究の道を選んだため、弟が就職として寺をつぐことになった由である。下野中尉の週番将校の時には、区隊だけでなく中隊全体の候補生がのんびり羽根を伸ばすことができたので、エンジンの吸気・圧縮・爆発・排気という機能に因んで「排気の週間」と名づけ、その週のくるのを待っていたこと、学徒出陣の候補生たち全員から敬愛され慕われていたお人柄のことなど、私の話をほころばせた棚瀬先輩であった。このような出会いから生まれたご縁で、その後も長い間可愛がっていただいたご兄弟が亡くなられて久しい。

### (四) 冷汗と大汗

「君の字は読みやすい」とおだてられ、いつのまにかガリ版切りが私の仕事になった。その結果、私の切ったガリ版が資料として手元に残ることになったわけである。自分で文章を書くのは大変であるが、他人の文章を写すだけなのでこの仕事は楽であった。しかし、しまいには宗教平和会議の総会場に掲げる「宗教平和宣言」を毛筆で書かされる羽目になった。それを命じられたのがあの名筆家の小口偉一先生であるから弱った。当然、大

先生が達筆を揮われるものと皆が思っていたから、寝耳に水で再三辞退したのに許されず、観念した。五センチ四方の字を、一二〇〇字以上も毛筆で書くという大仕事は、いくら覚悟をきめても冷汗物であった。実際に何時間かけて書いたかは記憶がない。とにかく書き終ったときには大汗をかいていたことだけを覚えている。「正式に習った字ではないが、筋は悪くない。」これが大先生の出来栄への批評であった。忘れられない一言である。

### (五) アルバイト料の相場

三十五日間の勤務を終えて、五月九日に壱千四百円のアルバイト料を受領した。日給二十円という約束であったが、棚瀬先輩のご尽力のお蔭で賞与までいただけて感激した。倍額の日給四十円になったからである。なお、五月十四日から十日間、小口偉一先生のお世話で、「学士院会員資格審査書類」をGH Oに提出するための筆耕を、宗教平和会議のアルバイターである高木きよ子、浅野満、藤田富雄の三人で引受けて、学士院に通った。学士院会員の業績に目を見張りながら、この英訳でよいのだろうか議論したりして、せっせとペンを走らせた。まだタイプは普及していない時代であったから、与えられた書類を正確に写すだけが仕事であった。日給は五十円であった。当時の学生アルバイトの相場がこの程度であったことを参考のために書き添えて、思い出の駄文を終りたい。